① 毎月1回25日発行　　第3種郵便物認可（昭和35年7月26日）

山と博物館

第35巻 第11号 1990年11月25日　大町山岳博物館

槙さんを訪ねた登高会有志　慶応義塾山岳会創立七十周年の年　茅ヶ崎にて　S59.10.30

前列左より　宮代良治　河野之保　早川義郎　槙有恒　深川安明　大歳豊彦
後列左より　宮下秀樹　金山淳二　国分勘兵衛　谷口現吉　渡辺栄次郎　笠原藤七　阿部益久　渡辺宏之　外山義夫　内田勇三　守屋時郎　山田二郎の各氏
（登高会会報　第27号より）

会長のいない山岳会

谷口　現吉

本紙『山と博物館』の最近二号に亘って、丸山彰さんが槙さんについてたいへん好い追憶の一章を書いて下さった。いかにも槙さんのお人柄のにじみ出た好いお話なので、丸山さんのお許しを得て登高会々報（慶応山岳部OB会の会報）にその一部を転載させて頂くこととした。そこでこの機会に、日本で一番古い学校山岳部OB会の発足の日のことを記してみたい。

登高会の創立は今を去ること約七十年、一九二一年一月十六日のことで、その日槙さんは既に渡欧されていて中条常七先輩（大正九年卒業・昭和四十四年没）がその意を体して次の様な創立の主旨を述べておられる。今の人達には読みにくい文章だが、ごく一部を省いて敢えて紹介する。

『慶応義塾の山岳的精神の訓練陶冶の下に生立ち（中略）驚の如く絆なき青春の凱歌をその絶頂に高唱せし吾々は一度塾を出て今や実社会の人事に没入するに際し自然の金剛大意志の教を憶う事切なるの余り常住発刺たる山岳的登高の精神独立自尊の精神を一層と強く不断に魂の奥底に銘するの必要を痛切に感ず是れ此の会の真の魂の要求によって生れ出ている所以である。

吾々は此の会を以って各に道義的自反向上の機会たらしめ此の会に由って山岳的登高の精神の真の体得実社会生活上への実現発揮を熱望す。

此の会は会長を置かない会員全体が自治的に独立自尊、全体主義の精神を以って各自会長を以って任じ真にして純乎なる意味のデモクラティックな会でなければならない。慶応義塾山岳会の光輝ある健実なる発展充実は全く合議制の各員共鳴の上に存するので其の連続発展である此の三田登高会も益々此の精神の発揮運用を誓言する』

（三田登高会の三田の文字は後日これを削除した）

さて登高会は会長をおかないことを知る人は意外に少なく、私達も敢えてこれを他に云う必要もなかったのだが、さきの槙さんの日本山岳会々葬の正式報告もこれを誤り記している。丸山さんはこれをもとに、私が登高会々長である如く記されたわけだが、丸山さんには一切その責はない。私は日本山岳会の当事者に向かってその部分の訂正を直に申し入れたにも拘わらず、未だにそのことがなされていないのはまことに遺憾である。

（山岳博物館顧問・日本山岳会名誉会員）

ボレアスの針葉樹林帯を駈けて
―カナダの自然―

丸山　晃

〈はじめに〉

この夏、一カ月余、レンタ・カーでカナダ横断の旅をした。途上二度北上し、北緯六十度線を巡った。ぽっかり抜けた空を戴く広大な大地を、野良犬のように這いずり回った。森林、凍原、草原、山岳地帯を駈けて、一万数千キロに及んだ。

カナダは、五大湖周辺の「東北方樹林」、アラスカからニューファンドランドへ帯状に延びる「北方針葉樹林」、北極海に面する「凍原」、中央部の「大草原」、ロッキー山脈のある「西方山岳樹林」と「北西海岸樹林」地帯に区分できる。私たちは、これらを抜けて走った。

起源の古い針葉樹は滅び行く生物群といわれる。トウヒやモミ属の針葉樹（陰樹）は、耐陰性の弱いカバやマツ（陽樹）を抑えて、亜寒帯特有の極相林となる。古木が倒れながら再生を繰り返す陰樹林は、時折崩壊して、陽樹林と交代する。この北の大地で、大火に見舞われながら、千年単位の荘厳な消滅と新生を繰り広げる、奥深く広大な針葉樹林の、人間の敵わぬ世界を見せつけられた。

①駈けた道　トロントからサンフランシスコへ　ボレアスの針葉樹林の動物たち　雪江画

〈シュガー・メイプルの森〉

カナダの標章、メイプル（カエデ）は、メイプル・シロップとしても知られる。甘美なシュガー・メイプルの分布は、この「東北方樹林」に限られる。シルバー・メイプルも、ここから北米東南部に広がる。私たちは、農園地帯で、安いピュアー・シロップを買い漁ったり、葉縁の切れ込みの強いシルバー・メイプルの街路を走った。

トロントからケベックへの、ハイウエイ、メイプル街道は、この樹林帯を突き抜けて走る。ミネソタからカナダ大西洋沿岸諸州に広がる、幅二五〇kmの「東北方樹林」は、後述の亜寒帯針葉樹林と南方の落葉樹林帯との推移林帯である。イースタン・ヘムロック（ツガ）などの針葉樹が進出できないところは、シュガー・メイプルの世界だ。シュガー・メイプルはイエロー・バーチ（カバ）、バスウッド（シナノキ）やアメリカン・ビーチ（ブナ）と混生している。森林地帯を駈けて八百km、その先にシャトー・フロントナックの聳える都市ケベックがあった。私たちはここで反転、オタワを通ってペンブローク、エスパニョーラ、ワワと点々と泊まりながら、ヒュロン、スペリオル両湖北縁の、一七号線をひた走り、サンダー・ベイに辿り着く。

〈すべての流れは北へ〉

カナダ・ワンウエイ・レンタルは、五度車を捨てては借りる旅であった。縦割の文化圏の国の横断は手強い。サンダーベイで車を乗り換え、一七号線を走り続けて、ブラック・ベアーとムース（ヘラジカ）を形どった標識に対面する。「すべての流れは、ここから北へ、北極海に流れ込む」と記してある。このあたりから、「北方針葉樹林」に突入する。ここは、ギリシャ神話の北風の神、ボレアスの大地である。「ボレアスの樹林」とも呼ばれる。北風が渡ってくるのだろうか。北極海に向けた、なだらかなスロープに広がる、カナダを横切る広大な針葉樹林帯だ。北はツンドラ、南はスペリオル湖岸に達する。ブラック・スプルース、ホワイト・スプルース（以上トウヒ）、バルサム・ファー（モミ）、タマラク、イースタン・ラーチ（以上カラマツ）、ペーパー・バーチ（カバ）やコーキング・アスペン（ポプラ）の純林の間に、氷触の湖沼が、無数に散在する地帯だ。この亜寒帯林は、西はシベリアへ、東は北欧へ延びるトウヒ、モミ、カラマツ属などの周極林だ。極地ツンドラと温暖なステップや広葉樹林帯に挟まれ、幅八百kmに及ぶ。東亜と北米東部では、北緯四五―五五度、北欧と北米西部では、六〇―七〇度に達する。

②　ボレアスの針葉樹林　低温に晒され裸出した樹幹
ウイニペグ　マニトバ両湖間

〈ボレアスの森の果て、凍原の街へ〉

カナダには、北へ通ずる道が三つある。ハドソン湾岸のチャーチル、ノースウエスト・テリトリーの州都、イエロー・ナイフとユーコンのイヌビックへ向かう道だ。その一つ、チャーチルへは、ウィニペグから週三回、国有

鉄道ＶＩＡが三四時間かけて通う。マニトバの州都、ウィニペグから、遠く地平線まで広がる「菜の花」を横目に北上、再び大森林地帯へ入る。南北に広がるウィニペグ、マニトバの二大湖の間を走る。ボレアスの樹林の真直なハイウエイは遠く一五kmは見えるだろうか。下っては上る道が果てしなく続く。焼けた林。黒く焦げた針葉樹が林立している。見渡すかぎり焼けただれている。真新しい焼け跡もあれば、もう何年も前の焼け跡にもぶつかる。冷湿な大気に守られたボレアスの樹林も、周期的乾燥のため、時折、破滅的な大火に見舞われてきた。多くは人為によるが、落雷が発端になるといわれる。大火による死滅と新生が繰り返された。焼け跡には、ペーパー・バーチやジャック・パイン（マツ）が入り込んでくるといわれる。

道路の終点ギラムから、ＶＩＡに乗って、早朝のチャーチルへ。ここは、北緯五八・八度、森林限界線上のツンドラ、凍原だ。浅い湖沼が点在し、小丘をヤナギやカバの矮木、地衣が覆う。背の低いファイア・ウィード（ヤナギラン）が一面に咲き、コトン・グラス（ワタスゲ）の穂が舞う。春と秋、ポーラー・ベアー（シロクマ）が、街を通って氷海とツンドラを往復するという。私たちは、フォート・プリンス・オブ・ウェールズを遠く望みながら、数百の白いベルーガ・ホエールの群泳を見た。三m位か。船を追い、船底に潜ってくる。

③ ハドソン湾のベルーガ・ホエールの群泳　チャーチル

早朝、暗い針葉樹林の中の、ギラムに降りたつ。グラバル道路を三百km走ってトンプソンへ。ザ・パスとの分岐を西へ、フリン・フロンからサスカトーンに向かう。途中、ジャック・パイン林の中の、日本に滞在したという若い兄弟経営のガス・ステーションに立ち寄る。人口一二人。夜になるとブラック・ベアーが彷徨うという。中に餌を吊るした鉄製のトラップを見せてもらう。ボレアスの針葉樹林帯には、ブラック・ベアー、グレイ・ウールフ、ムース（ヘラジカ）、カリブー（トナカイ）などの大型動物が棲む。ハイウエイには、「シカ注意」の標識が至る所にあったが、ギラムへの道でシカを見たほかは、巡り合うことはなかった。繁殖期や夜の走行は危険だと聞いた。

〈北緯六三度、樹林に浮かぶ幻の街へ〉

サスカトーンからＶＩＡに乗る。エドモントンで車をレンタル、北上する。レッサー・スレーブ湖に寄り、ハイ・レベル泊。三五号線を走る。ペーパー・バーチ（カバ）林が続く。白い樹肌の密生した純林が果てし無く続く。両側に芝生のような緩衝ベルトのある二車線ハイウエイは、さながら壮大な「カバ」の並木道であった。カバが切れると、また針葉樹林。「北緯60度、ノースウエスト・テリトリー」の標識が迎える。ここは、森林限界が北上していて暑い。ハイウエイはやがてヘイ・リバーにぶつかる。グレート・スレーブ湖南岸の街だ。ボレアスの針葉樹林北端の湖は大海のようであった。網の目のように無数の湖沼を結んだ川が、大河となって、いくつも流れ込む。打ち上げられた白い化石のような流木。極北の森の奥で、裂かれ、砕かれ、揉みくちゃになった「モミ」だろうか。ボレアスの針葉樹林の、近づけない世界を垣間見たようであった。グレート・スレーブ湖北岸の街、イエロー・ナイフへの道は酷しかった。フェリーでグレート・スレーブに流れ込む大河を越え、グラバル道路を走らなければならない。砂利道といっても穴ぼこはない。粘土のように固まっていて時速百kmで走れる。だが往復千km、二日は必要だ。時間がない。グレート・スレーブ湖の北の、ボレアスの樹海に浮かぶ都市が、幻のように思えた。

三五号線を戻る。ピース・リバーを左にして、二号線を西に針路を取ってグランド・プレーリー泊。大平原だ。小麦の貯蔵庫が楼閣のように建ち並ぶ。大穀倉地帯だろう。ボレアスの森林ともお別れだ。大平原は突如様相を変え、険しい山岳地帯に突入した。見る見る景色が変わって谷底に落とされ、高度を上げてまた大平原に戻る。あの大きなロッキー山脈の前奏だったのだろうか。四〇号線をグランド・カッシに向かうグラバル道路は、穴ぼこもあれば、砂煙も、もうもうと上がる。山道を三百km走って舗装になる。ロッキー山脈を遠望して二百km。小さな懸垂する山が近づいて、見上げながらアサバカス川すれすれのハイウエイをジャスパーに入る。

④ グレート・スレーブ湖　針葉樹の流木
ヘイ・リバー

〈南下するボレアスの樹林〉

私たちは、ボレアスの樹林を抜け、サンフランシスコへ向けて、ロッキー山脈、北西海岸、シエラ山地、カリフォルニアのウッドランドの樹林帯を走った。これらの針葉樹林帯は、ボレアスの針葉樹林の南進林だ。北米西部を南北に走る山脈に沿って、ボレアスとメキシコ系種が入り込んできている。

ロッキー山脈を縦貫するハイウエイ、アイスフィールド・パークウエイをジャスパーからレイク・ルイーズに向かう。三千m級の壮大な山の間を縫い、標高千二百mから二つの二千mの峠を越えて千七三〇mへ。ここは「ロッキー亜高山樹林帯」の真只中だ。マウンテン・シープ（ビッグホーン・シープ）が

車に寄ってくる。チングルマに似た種子をつけた、イエロー・ドリュアドが道路端に群生する。サブアルパイン・ファー（モミ）やエンゲルマン・スプルース（トウヒ）の純林が、エメラルド色の湖の点在する山裾を覆う。二千―二千三百mに達する「亜高山樹林帯」は、西北部ではサブアルパイン・ファーとマウンテン・ヘムロック（ツガ）が、南部のオレゴン州のクラマス山脈やカリフォルニアのシエラ・ネバダではマウンテン・ヘムロックとホワイト・パインやロッジポール・パインがペアーを組む樹林になるといわれる。

レイク・ルイーズからヨーホー国立公園に立ち寄り、南北に長く連なるグレーシャー国立公園の山々を遠く望み、オカナガン渓谷を抜けてヴァンクーバーへ。途中、千三五〇―千九百mに達する「ロッキー山地樹林帯」に広がるダグラス・ファー（ベイマツ）、ロッジポール・パインやポンデローサ・パイン林を抜ける。ヴァンクーバーやヴィクトリアが分布圏にはいる「北西海岸樹林」は、アラスカからカリフォルニア北部に至る海岸線に沿って発達する好湿性樹林だ。輸入材として知られるシトカ・スプルース（トウヒ）、ウエスタン・ヘムロック（ツガ）や、コスタル・レッドウッド（アカスギ）の樹林が、樹高六〇mにも達する。

⑤ ロッキー亜高山樹林　ペイト湖と山裾を覆う針葉樹林　バンフ国立公園

ヴァンクーバーからサンフランシスコへのハイウエイ五号線は、いつの間にか千五百mにも登って、かなり急な坂を延々と下る。「シエラ山地樹林帯」の山間を縫うように、大きくカーブして走る。山を横切り、貫ぬくことはない。高いところではシュガー・パインやホワイト・ファー林、低くなるとポンデローサ・パインやダグラス・ファー林になる。サンフランシスコを間近に、一面枯れた草原に公園のように立ち並ぶ、メキシコ系のカシやトショウの森「ウッドランド」にぶつかる。ヘッドライトに反射する五車線の路上標識を頼りに、一路、夕闇のサンフランシスコへ。吸い込まれるような針葉樹林をひた走ったこの旅もここで終わる。

〈日本の針葉樹林〉

ボレアスの針葉樹林は日本列島を南下、北海道から本州の亜高山を貫いて、四国に及ぶ。このダケカバを伴うトウヒやモミ属の樹林は、北海道東北部ではトドマツ（モミ）やエゾマツ（トウヒ）林、東北地方北部から白山ではオオシラビソ（アオモリトドマツ、モミ）林、中部山岳ではオオシラビソやシラビソ林、紀伊半島ではシラビソ林、そして、四国ではシコクシラベ林へと変わる。

ボレアスの針葉樹林は、かつて晩氷期に日本列島一帯に広がっていた。温暖期、この亜寒帯林は北方に退いて、夏緑林と照葉樹林が進出してきた。落葉広葉樹のブナやカエデの夏緑林（冷温帯林）が針葉樹林帯を取り巻くように、九州から四国を経て本州の山地を延び、渡島半島に達している。海岸沿いや沖積地にはタブ、丘陵や山地にはシイやカシの常緑広葉樹の照葉樹林（暖温帯林）が、日本列島の低地を、太平洋側は岩手県中部、日本海側は青森県南部に入ってきている。

〈おわりに〉

ボレアスの針葉樹林末端のこの列島の針葉樹林は、北に奥深く広がる広大な大地の生命の息吹を受けて息づいている。その鼓動と呼吸が伝わってくるようだ。人間が及びもつかない世界がそこにある。照葉樹林は縄文時代に進出した。古来、日本人の生活の舞台となった照葉樹林は、いまは分断され、わずかしか残されていない。日本の森林の三〇%を占めるスギ、ヒノキ、カラマツ、トドマツなどの人工林は五〇%に、天然林は今の半分の十五%にされるといわれている。照葉樹林はおろか、ブナ林に代表される夏緑林も、ボレアスの針葉樹林も、この列島では傷つき、苛酷な宣告を受けている。荘厳に消滅と新生を繰り返す、奥深く広大なボレアスの針葉樹林は、人間が及びもつかない、大きな力が働いている世界だ。人間が、そこに、「どう入って行かなければならなかったか」「どう入って行くべきか」が、いま問われている。

おわりに同行ドライバーの雪江さんに深く謝意を表しておきたい。

（東京大学助手、大町市出身）

投稿

日本で登山ハイキング等で一番多い事故が、木道・橋・梯子等での事故です。この写真のように、ちょっと、金網を張るだけで、滑る事故は防ぐことが出来ますが、どうしてか、日本では、やらないのが不思議です。

この写真はニュージーランドの小さな橋に張られた金網です。ニュージーランドでは、滑りやすい所には最初から金網を張ってあります。

（日本山岳協会公認指導員　東京野歩路会　野本　秀旺）

山と博物館第35巻第11号
一九九〇年十一月二十五日発行
発行所　長野県大町市　TEL㉒〇二一一　大町山岳博物館
印刷所　長野県大町市俵町　大糸タイムス印刷部
定価　年額一、二三〇円（送料共）（切手不可）
郵便振替口座番号（長野四―一二二九三）